

院費ならびに創感染合併率の面から検討した結果つぎの結論を得た。1) 手術例においては、セフェム系1剤を投与した群に比し、ホスホマインを投与した群では重症例が多いにも拘らず、入院期間、入院費ならびに創感染合併率に差を認めなかった。2) 保存的治療例では、セフェム系1剤を投与した群に比しホスホマイシン(土ミノサイクリン)を投与した群では、入院期間ならびに入院費に明かな差を認めなかった。以上より、ホスホマイシンはセフェム系抗生物質と同等もしくはそれ以上の有用性が期待できると考えられる。

7) ステロイド・パルス療法42例における重症感染症の検討

石塚 修・塚田 弘樹
瀬賀 弘行・近 幸吉
五十嵐謙一・和田 光一
荒川 正昭 (新潟大学第二内科)

【目的】ステロイド・パルス療法(以下パルス療法)は、膠原病、腎疾患、血液疾患、呼吸器疾患において、その治療の有効性が認められている。しかし、その免疫抑制作用のため多彩な感染症を呈することが知られている。私達は、当科で行ったパルス療法後に於ける感染症の詳細について検討した。

【方法】対象は、1986年より6年間に、当科においてメチルプレドニゾロン 1000 mgx 3日間、500 mgx 3日間のパルス療法を行った42症例である。疾患の内訳は、膠原病21名(SLE 17名、MRA 2名、PN 1名、MCTD 1名)、腎疾患5名(ネフローゼ症候群4名、腎移植後1名)、血液腫瘍疾患4名、呼吸器疾患11名(特発性間質性肺炎急性増悪6名、パラコート肺臓炎2名、薬剤性肺臓炎2名)、皮膚疾患1名であった。パルス療法後1カ月以内に生じた、呼吸器、尿路、皮膚、全身感染症について調査した。

【結果】呼吸器感染症13名(細菌性肺炎8名、カリニ肺炎3名、サイトメガロウイルス肺炎3名)、尿路感染症5名(腎盂腎炎1名、膀胱炎4名)、皮膚感染症3名(Herpes zoster 1名、Herpes simplex 2名)、敗血症

4名を認めた。特に、緑膿菌敗血症の経過は急激であった。また、カリニ、サイトメガロ等の compromised host にみられる感染症も高頻度に見られ、その予後も不良であった。

【考察】パルス療法を行う際、通常の感染症対策を行った上で、緑膿菌への早い対応、カリニ肺炎に対して pentamidine あるいは ST 合剤による予防法の確立が必要なが示唆された。

8) GBS(B群溶連菌)が関与したと思われる後期流産に対する抗菌療法

有波 良成・関塚 直人
長谷川 功・高桑 好一 (新潟大学産科
田中 憲一 (婦人科))

後期流産の原因としては頸管無力症がよく知られているが、一方最近腔・頸管からの上行性子宮内感染が後期流産・早産の発生に重要な役割を果たしていることがわかってきた。感染を原因とする流早産は散発的にみられるのが一般的だが、我々は共通する臨床の特徴(1. 陣痛先行の反復性後期流産、2. 予防的頸管縫縮術や子宮収縮抑制剤が無効、3. 頸管内に GBS が持続的に陽性を示し、流産時 CRP が高値を示した)を持つ4症例を経験し、頸管内に持続的に存在していた GBS が妊娠中期に上行性子宮内感染を起こし流産を反復したものと推察された。これらに対して GBS をターゲットとした抗菌療法(非妊時より ABPC 経口・CP 腔坐で GBS 陰性確認後妊娠を許可し、妊娠中 GBS 陽性時抗生剤投与・イソジン腔洗を追加)を試み、妊娠した3症例のうち2症例に妊娠継続期間の延長を認め、生児を得た。

II. 特別講演

産婦人科領域における感染症の最近の話題

山形大学医学部産科婦人科学教室助教授

千村 哲朗 先生